

1 学 年 第3～6学年

2 テーマ 「小規模校から発信する、「そろえる教育から」「伸ばす教育」への質的転換」～どこからでも、だれとでもできる ICT を活用した、子供視点の「個別最適な学び」と「多様な他者との協働的な学び」との一体的な充実～

3 実践内容

(1) 本校の特徴と付けたい力

犬居小には小規模校ならではの、「固定された人間関係の中で言いたいことが言えない。」「子供に関わる大人が手を出し過ぎるため大人に頼ることに慣れ自分の力で見通して最後までやり切る経験が乏しい。」「山間地のため社会経験をする場が少ない地域である。」といった特徴がある。

そこで、キャリア教育の計画の中に、子供たちに付けさせていきたい力として「伝える力^つ」「やり切る力^や」「見通す力^み」「身に付けた能力を実際に活かす力^い」の4つを掲げ、学校生活のあらゆる場面で意識させるようにしている。

またこの4つの力を身に付けるためには、各教科・領域で身に付ける知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力が必要になるため、これらも同時に身に付けていくことができるように学習や活動の進め方、形態なども工夫している。

(2) 活動の具体例

① 発信する活動と家康プロジェクトへの参加

春野町は人口減少が止まらない。直近10年間では1300人減少し、現在の人口は3700人程度。犬居小の子供たちはこの現状を直視し、ふるさとを存続させるために今自分たちが楽しみながらできることを考えて課題やゴールを設定し、様々な活動を行っている。

令和3年度から自分たちの学校や地域の良さを広く知ってもらえるよう、発信する活動を行ってきた。犬居小の良さをアピールするチラシを作製して新聞の折り込みに入れてもらったり、協働センターなど多くの人が利用する場所に置いてもらったりした。

また、6年生を送る会に合わせ、地域の歴史を発信する素材づくりと6年生との思い出作りを兼ねて～犬河ドラマ～「どうする天野氏」を制作した。

こうした取り組みを学校ホームページで公開したところ、それを見てオーストラリアから2名の転入生が入り、子供たちは活動の手応えを感じる事ができた。

令和4年度からは浜松市で募集した「Yes!家康プロジェクト浜松」に参加し、発信することをより一層強く念頭に置いて取り組んでいる。

6年生は地域の歴史分野の魅力の発信を担当し、徳川家康と地域の武将天野氏との合戦場面を描く壁画制作を企画した。全校児童が少しずつ携る形で描き上げるようにしたため、全校児童の一体感が強まったり、地域の歴史の魅力強く印象付けたりすることができた。

5年生は地域に昔から伝わる伝説や昔話を紙芝居にする活動を中心に行い、図書館に寄贈して色々な人の手に取ってもらえるようにした。

3・4年生は犬居小出身者が経営する洋菓子店に協力してもらい、地域の特産物であるお茶を使ったスイーツを考案し、商品化して店で販売してもらうことで、学校や地域をアピールした。

こうした活動を担当した学年単体で行うのではなく、全校児童や他学年が関わる協働的なものになるように活動形態を工夫することで、伝えることや見通しをもつことの重要性が更に高まり、最後の発信する段階だけでなく、活動のプロセス全体を通して「伝える力^つ」や「見通す力^み」、思考力・判断力・表現力、学びを調整する力などを高めていくことができた。

② ビブリオバトル

出場者が1人5分の持ち時間で本の紹介をし、聞いていた人はその本を読みたいと思ったら1票を投票する。出場者の中で最多得票者が優勝で、その人が紹介した本がチャンプ本に選ばれる書評合戦である。犬居小ではこれを読書週間の委員会イベントで全校で行ったり、国語の授業で並行読書した本の情報共有の手段として行ったりしている。投票してもらうためには聞き手のことをよく考えて伝える内容や伝え方を工夫しなければならず、ゲーム性もあるため楽しみながら自ずと「伝える力^つ」や「見通す力^み」、思考力・判断力・表現力、知識・技能や調整力を身に付けていくことができた。

4 成果と課題

過疎の地域の人口減少について学校の活動で解決を図ることは難しいが、家康プロジェクトを通して、子供たちが大人になったときに問題を本質的に解決していく力の基礎となる「伝える力」や「見通す力」を身に付けることができた。更に問題解決の原動力となる「自分のふるさとの良さが分かり大切に思う心」を育てることもできた。これは、学校評価での「ふるさとを大切に思うか否か」を問う設問への回答からもわかる。昨年度の卒業生が自分で考えて犬居地区を盛り上げるためのイベントを企画し、賛同者を募る活動を自主的に始めていることから、教師の側で狙った力が付いていることが言える。

ICTの活用については、参観会で高学年の子供たちが家康プロジェクトの活動報告や、春野の魅力の発表をスライドを用いて行い、分かりやすく保護者や全校児童に活動の成果を伝えることができた。「伝える力」「見通す力」「やり切る力」、思考力・判断力・表現力や、調整力も身に付けることができたと思っている。

また、発表の中心になる事柄は自分で考えたり、学年内で分担したりしたため同じ内容が2つとない。小規模校の研究テーマにある“ICTを活用した、子供視点の「個別最適な学び」と「多様な他者との協働的な学び」との一体的な充実”が実現できたものとする。一方、紙芝居を寄贈した春野図書館のインスタグラムや、スイーツ作りで協力をいただいた洋菓子店のフェイスブックなどSNSを用いた発信の効力が極めて大きいことが確認できたので、今後慎重に活用の仕方を考えていきたい。

課題としては、活動の成果を如何に残し、今後も発信していく活動を如何に持続していくかである。数年も経つと、職員も代われれば児童も代わる。何も手段を講じなければ今までの活動の成果は散逸し、活動も終わってしまう。活動の成果を後年の職員や児童が分かるような形で保管し、新たな活動に役立てられるようにしておかなければならない。そうした活動も子供たち自身が考え、全学年の児童が協働し、職員が協力する形で進めていくのが望ましい。

6年生との壁画制作の様子と完成した壁画



3・4年が考案したスイーツ

5・6年生が制作した伝説の紙芝居



春野文化センターでの「どうする天野氏」の上映の様子